

記念号の発刊にあたって

史学科主任 渡辺 節夫

本号は二〇〇四年三月をもって青山学院大学を定年退職される加茂雄三、奥崎裕司両教授の退任記念号である。

本学への着任順ということで、先ず加茂雄三教授の略歴を紹介させて頂きたい。先生は一九三六年に東京にお生まれになり、一九六〇年に東京大学文学部西洋史学科を卒業され、同年東京大学大学院社会科学系国際関係論専門修士課程に進まれ、一九六七年に同博士課程を単位取得退学されている。その間、米国政府フルブライト留学生としてニューメキシコ大学大学院歴史学専門博士課程に在籍された。一九七一年に社団法人ラテン・アメリカ協会研究会理事を辞され、本学文学部史学科助教授として着任された。

以降、現在に至るまで、三十三年の永きにわたり、本学において研究・教育に勤しまれ、とりわけ文学部史学科の発展に貢献された。その間、キューバのハバナ大学、メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコにおいて客員研究員として活動された。また、一九九七年から三年間国立民族学博物館の研究員を務められた。

特に青山学院大学においては、学生部長、文学部長、大学院文学研究科長、副学長の要職を務められるとともに、青山学院評議員、理事を歴任され、管理・運営の面でも重要な役割を果たして来られた。

先生の研究の主たる対象は中南米の近現代史であり、後掲の業績一覧に示されているように、研究業績は極めて多い。著書としては『世界の歴史二』三・ラテン・アメリカの独立』講談社、一九七八年）、『ラテン・アメリカ・その歴史と風土』（日本放送出版協会、一九八七年）、『これからの世界史六・地中海からカリブ海へ』（平凡社、一九九六年）の他に、三八冊に及ぶ共著、編著がある点が印象的である。これらの著作の対象は米国の対中南米政策、ラテン・アメリカ諸国の内政や民族運動、近代化が中心であるが日本や中国との関係も視野に入れられている。これら一連の著作が刊行された時代（一九六四―二〇〇〇年）は第二次世界大戦後の厳しい冷戦時代と東欧における社会主義政権の相次ぐ崩壊という激動の時代であり、その中の第三世界の今後の方向性について重要な示唆を与えるものと思われる。

これらと並行して、キューバ革命、中米危機などについて『国際問題』、『国際政治』など専門誌に論文を発表されている。先生の研究活動の特徴は

基本的に社会に広く向けられている点にある。一般向けの雑誌「世界」、「中央公論」、「朝日ジャーナル」、「エコノミスト」や各種の新聞などに時宜を得た多くの時評、論説を発表され、講演活動も展開されてきた。これらは先生の多方面にわたる社会的活動と表裏の一体をなすものである。海外青年派遣団、中米復興開発国際委員会、キューバとの学術交流、日本人移民百周年、などが挙げられる。一九九五年にはキューバ共和国友好勲章を受章されている。最近では日本政府の「文化無償援助」の評価調査団の団長として中米・カリブ海諸国を訪問され、日・カリブ友好協力基金日本委員会委員として活躍されている。

また、先生は教育に対する情熱と関心の高さで良く知られている。本学では史学科の専門科目、大学院の演習科目はもとより、他学部、或いは二部の学生を対象とした教養科目、高等部生のための入門講座を積極的に担当され、多くの学生に感銘を与えられた。また、首都圏を始めとする各地の大学においても講義を担当されている。

以上のように加茂教授の活動分野は極めて広く枚挙に暇がない。しかし何よりも評価されるべき点は、中南米の近現代史に関する専門研究を基礎に教育と社会的、公的活動を精力的に展開されてきたことだと思われる。日本におけるこの分野の研究に先鞭をつけられた点での功績は言うまでもないが、この激動の二一世紀の国際社会において中南米諸国との友好関係実現のために一層のご活躍を期待したい。

次に、奥崎裕司教授について略歴から紹介させて頂くこととしたい。先生は一九三五年に東京にお生まれになり、東京大学文学部宗教学宗教学科を一九六〇年に卒業され、同大学人文科学研究所宗教学宗教学専攻修士課程に進まれた。同課程修了後、一九六三年に東京教育大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程に入られ、一九六六年に同課程を修了、同大学院博士課程に進まれ、単位取得退学されている。母校の高輪高等学校の教諭を務められた後、東京教育大学文学部、筑波大学助手、専任講師を経て、一九七九年に専修大学文学部助教授、次いで同教授となられた。一九八三年に青山学院大学文学部史学科教授として着任されている。

以降現在に至るまで二十一年の永きにわたり本学において教育・研究に勤しまれ、本学、とりわけ文学部史学科の発展に貢献された。教育の面では東洋史演習、特殊講義などの専門科目のみならず、大学院の演習科目においても後進の育成に尽力された。他方で一、二年次の学生を対象とした教養教育では十分に力量を発揮され、教育を通して大きな感銘を与えられた。また、その間、東京大学始め多くの大学において非常勤講師として教育に情熱を注がれた。

先生の研究対象は中国前近代であるが関心の対象は極めて広く、多様な成果を残されている。しかし中心は明・清時代であり、主著「中国郷紳地主

の研究」(汲古書院、一九七八年)は学会で高い評価を得ている。その他著書としては古代中国の政治史を対象とした「項羽・劉邦時代の戦乱」(新人物往来社、一九九一年)、また理論面では「中国史から世界史へ 谷川道雄論」(汲古書院、一九九九年)を物されている。それとは別に実に四五編に及ぶ専門雑誌論文を公刊されている。これらの論文は極めて多様であり、また多方面に及んでおり、先生の歴史全般に対する関心の広さと深さを示している。しかし、根底に中国史を世界史全体の中に如何に位置付けるかという大きな課題意識があることが知られる。同時に宗教・思想の深い学識の上に中国の士大夫、地主や民衆思想とその歴史的、政治的な意味を問い続けようとする一貫した姿勢を窺うことができる。特に民衆叛乱に対するご関心の深さはそのことを示している。

その他、ヨーロッパの研究者の中国史、アジア史に関する論説の翻訳、日本の学術研究への書評も公刊されている。先生の教育への情熱の強さは良く知られているところである。それは教科書や授業のあり方についての現状批判を少なからず公刊されていることから知られるところであるが、特に二〇〇三年に二度にわたり刊行された「日本の黎明 青山学院大学の若者たち」(日進報道刊)によく表れている。ここでは本学の学生たちをモデルに二二世紀を担う若者たちへの大いなる期待が表明されている。激動の二二世紀においてアジア、その中の日本のこれからの進路について、積極的に提言されることを期待したい。

(二〇〇四年三月一〇日、記)